

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・佐藤秀樹

インタープリテーションとは、「環境保全地域、公園、博物館など、社会教育の場における持続可能な社会づくりのための教育的コミュニケーションであり、参加者の興味や関心を引き出しながら、物事の背後にある本質に迫ろうとする、体験を重視した教育活動」と一般的に定義されている（津村他、二〇一四）。

本稿では、インタープリテーションの歴史、活用、特徴、および技能についての概要を解説する。また、学生が授業の中でインタープリテーションを実践した体験を基に、学生が伝える際に工夫した点や難しかった部分を分析し、今後の授業改善に役立てたい。

インタープリテーションの

歴史

インタープリテーションは、一九世紀後半のアメリカで始まった。一八七二年に最初の国立公園であ

るイエローストーン国立公園が設立され、その後、公園管理者による来訪者へのプレゼンテーションやガイド活動が行われるようになった。一九二〇年代には、ヨセミテとイエローストーンで公式なインタープリテーション・プログラムが開始され、ナチュラリスト（自然愛好家）が初めて任命され、来訪者への教育活動が制度化されていった。

一九三〇年代には、歴史教育を行うヒストリアンの役割が加わり、一九五〇年代にはフリーマン・テイルデンの著書『Interpreting Our Heritage』により、インタープリテーションの基本原則が提唱された。このことから、国立公園局でのインタープリテーション技術の向上が進んでいった。

日本では、一九五三年、国立公園に「現地駐在管理員」が配置されたが、インタープリテーションの活動としては認識されていなか

った。一九五七年に民間人ボランティア「国立公園臨時指導員」が導入され、一九六六年には「自然公園指導員」へ改称されることで、本格的なインタープリテーション活動が始まった。

インタープリテーションの活用と特徴

インタープリテーションは、公園や博物館、環境保護地域などで広く活用されている。その目的は、単に情報を伝達するだけでなく、参加者と自然や文化資源との間に知的・感情的なつながりを構築することである。これにより、持続可能な社会づくりを目指す教育的コミュニケーション手法として、環境教育や文化教育の重要な一部を担っている（写真1）。

具体的に見ると、「自然」をテーマとした活動では、五感を通じて自然を体験し、感性を育むことが重要である。自然を楽しむ、参加者同士の感性の違いに気付いてもらうためのインタープリテーションが大切になる。

インタープリテーションの特徴としては、以下の六つに整理することができる（津村他、二〇一四）。

- ① 地域の資源に基づいた教育・自然や文化資源を教材として活用し、それらの意味や相互関係を解き明かす。
- ② 参加者の関心による教育機会の創出・参加者の興味や関心を引き出し、それに基づいて教育活動を実施する。
- ③ 多様なメディアの活用…展示、印刷物、映像など多様なメディアを駆使して情報を伝達する。
- ④ 幅広い対象者層…子どもから大人まで幅広い層を対象とする。
- ⑤ ストーリー性…テーマに基づいたストーリーテリングを行い、情報の伝達をより効果的にする。
- ⑥ 体験の重視…直接体験を通じて学びを深めることを重視する。



写真1 筆者が実施した Bangladesh・シュンドルボン(ユネスコ世界自然遺産)での小学生を対象としたスタディツアー。船内でシュンドルボン地域の自然環境の一部を模型にした教材を使用したインタープリテーション

(2017年12月、Bangladesh環境開発協会撮影)

インタープリテーションの トークの組み立て方と 伝え方の技能

インタープリテーションのトークを組み立てる場合は、以下の四段階で構成する（キャサリン他、一九九四）。

- ① つかみ・興味を引く導入で参加者の心をつかむ。ユーモラスなエピソードや問いかけを用いることが有効である。
- ② つなぎ・導入部と本体を結びつけ、参加者の興味を継続させる。
- ③ 本体・主要メッセージを具体的な例で説明する。
- ④ まとめ・主要なポイントを要約し、行動を喚起する締めくくりを行う。

また、効果的なインタープリテーションの伝え方で重要なことは、以下の七つに整理できる（キャサリン他、一九九四）。

- ① 準備・テーマの調査や参加者の属性把握、適切な身だしなみや機材の準備が重要。
- ② 話し始め・最初の三〇秒が信頼感を持たせるために重要。姿勢を正し、参加者と視線を合わせることが求められる。
- ③ 原稿の使い方・原稿に頼りすぎ

ず、ポイントを書いたメモを持つ程度に留め、自然なトークを心がける。

- ④ 声の使い方・声の調子やテンポを変え、強調したい部分はゆっくり話す。時に「間」を取り、大切なポイントを際立たせる。
- ⑤ 言葉選び・能動的かつ具体的な名詞や身近な言葉を使い、イメージを効果的に伝える。
- ⑥ ボディランゲージ・身振り手振りや表情を用いてコミュニケーションを取り、重要なポイントを強調する。
- ⑦ 小道具の使用・好奇心を引き出すために効果的な小道具を使い、視覚や触覚を刺激する。

その他のポイントとしては、参加者の興味を刺激し、創造的な思考を促す「問いかけ」を行う、重要なポイントを際立たせるために「ジェスチャー」を用いる、赤は興奮を、緑や青はリラククスを促す「色の使用」などがある。

本学の学生によるインタープリテーションの実践

筆者は、二〇二二年度に江戸川大学の「インタープリテーションとエコツーリズム」の授業において、受講生全員（三五人）を対象にインタープリテーションの歴史的背景、

特徴、活用方法や伝え方に関する技能を四回（二〇〇分/回）に分けて解説した。その上で、

各学生にはKP法（紙芝居プレゼンテーション）を用いたインタープリテーションを三〜五分程度実施してもらった（写真2）。KP法とは、「キーワードやイラストなど



写真2 KP法を用いた学生のインタープリテーションの内容の一例

を書いた何枚かの紙を、ホワイトボードなどにマグネットを使って貼りながら相手に説明をする」方法である（川嶋、二〇一三）。学生が選んだインタープリテーションのテーマは、「野鳥、魚、クマ、サンゴ礁、森林、スポーツ、デイズニールランド、健康とたばこ」など、多様であった。また、インタープリテーションを行う対象者は各学生が決め、その参加者を想定して実践してもらった。

学生には、Googleフォームを用いてKP法を実践してみた感想を記述式（二〇〇字以上）で回答してもらった。その意見を要約すれば、多くの学生が「簡潔で分かりやすい発表を心がけ、イラストや図を活用することで視覚的にも情報を伝える工夫をした。また、声の

大きさや抑揚、話し方にも気を配り、聴衆を引き込む工夫の重要性を実感した」と答えていた。一方で、「話のつかみや結び方に改善の余地を感じた」という意見も多かった。以上から、各学生は分かりやすい言葉を使用し、視覚的に伝える工夫を行ったことが分かる。その一方で、相手の興味・関心を引き出すための話し方や、結論を効果的に伝えるためのメッセージの送り方については課題が残ったことから、授業の中で実践的な場面を想定した練習を重ねることが、授業の改善点として挙げられる。

参考文献

- ・川嶋直二（二〇一三）「KP法 シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション」みくに出版
- ・キャサリン・レニエ、ロンジマー・マン、マイケル・グロス（一九九四）「インタープリテーション入門―自然解説技術ハンドブック」小学館
- ・津村俊亮、増田直広、古瀬浩史、小林毅（二〇一四）「インタープリター・トレーニング―自然・文化・人をつなぐインタープリテーションへのアプローチ」ナカニヤ出版

佐藤 秀樹 ● さとう ひでき

江戸川大学社会学部現代社会学科准教授、国立公園研究所研究員。専門は、環境教育、環境社会学、国際協力。

バン格拉デシュでの住民参加型の環境保全活動や千葉県松戸市における市民社会でのSDGs普及啓発の取り組みを実践しながら、アクシヨニリサーチによる研究を進めている。